トップの素顔

vol. 3

㈱大津屋
代表取締役会長

小川（おがわ） 明彦（あきひこ） 氏

“ やってみたい ” にとことんこだわって、チャレンジを続ける

【プロフィール】

昭和 31 年福井県生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。
昭和 54 年、株式会社 大津屋に入社。
平成 2 年より同社代表取締役、令和 5 年から同社代表取締役会長に就任。
福井商工会議所議員、持続可能な社会共創委員会委員長を務める。

【会社概要】

所在地：福井市西木田 1 丁目 20-17
創　業：1573 年　　設　立：1963 年 9 月 27 日

普段、垣間見ることが出来ない福井商工会議所の議員の素顔を探る「トップの素顔」。今回は㈱大津屋 代表取締役会長の小川明彦氏にお話を伺いました。

大津屋を継ぐことを決意した大学時代の思い出

昭和31年、福井県に生まれた小川氏。幼いころから父親が転勤を繰り返していたため、少年時代は両親と離れて、母方の実家である酒屋の大津屋から高校に通っていました。

その後は慶應義塾大学の商学部に入学し、会社の経営について学びます。大学時代の小川氏について尋ねると「軟式野球と麻雀に熱中してました」と笑顔で話します。大学4年生になり、周囲が就活をスタートする中、自分が本当にやりたいことは何だろうと考え始めたと言います。ある日、山手線の満員電車に乗り込んだときに、「こんな落ち着かないところで働くのは、自分には向いていない。のどかで住み慣

れた故郷の福井県で、自分のやりたいことにとことん取り組みたい」との思いが芽生え、少年時代を過ごした大津屋に戻り、家業を継ぐことを決意します。

～酒屋からコンビニへ～ 新業態への挑戦

福井に戻ってきた小川氏は酒屋の家業に勤しむ一方で、徐々にその仕事に限界を感じるようになります。共働き世帯が増え始めた当時の福井では、日中にお酒の営業に回っても、家人が居ないケースが増えてきたのです。そこで、日中に買い物ができない共働き世帯をターゲットにした新規事業が展開できないかと考え、コンビニエンスストアという業態に目をつけます。

様々な試行錯誤を経て、昭和56年8月に福井初のコンビニ「オレンジBOXおおつや」（福井市西木田）を開店しました。開店当初は、「福井県民にコンビニという業態がなかなか理解されずに苦労した」と語る小川氏。そんな状況を打破すべく小川氏はTVCMを活用することにしました。学生時代の貯金を取り崩して放送したCMにより、少しずつ県民にコンビニの特徴や高い利便性が浸透。1年後には事業が軌道に乗り始めたそうです。

その後、福井に大手コンビニが進出してくると、独自の戦略として店内で調理した温かい料理を提供する手法や、福井県民の好みに合わせた商品ラインナップを取り入れるなど大手チェーンとの差別化を図りました。数々のアイディアの基となったのは、大学時代に考えていた「自分がやりたいことにとことん取り組みたい」という熱意からだそうです。「自分が消費者目線に立って、こういうサービスがあるとうれしいと思うことを実践してきた」と振り返ります。

平成16年には、ランチバイキングを取り入れることで、コンビニと弁当屋に飲食店の要素を掛け合わせた独自のビジネスモデルの「オレボステーション フェニックス」（福井市松本）を開店。平成28年には福井駅西口のハピリンに伝統工芸品と食のセレクトショップkirari（きらり）と、観光物産館福福館（ふくふくかん）を展開し、工芸品の卸しや県の名産品づくりなど事業を拡げました。

これらの挑戦から小川氏は「はじめから全てうまくいくということは無く、チャレンジはプランの修正と再投資が必要。だからこそ、恐れずに初めの一歩を踏み出すことが大切という考えを持つようになった」と話します。

オレンジBOX名物のお惣菜バイキングには作りたての料理が並びます

あらゆる可能性を考慮して、最善手を探す楽しさ

新たな事業に果敢に挑戦し、未知の市場の開拓を続けてきた小川氏。そんな小川氏のチャレンジスピリットの原点ともいえるのが、大学時代から続けている「麻雀」。その腕前は福井県代表として全国大会に出場した経験があるほどです。

「麻雀は配られる手牌と相手の切る牌を見ながら、相手との押し引きのバランスを考える競技。あらゆる可能性を考慮しながらも、自由な発想でプレーできるのが麻雀の魅力」と語ります。また、麻雀では最善の手を打ったとしても、結果として自分の思った通りにいかないことがほとんどで、そういった負けにも一喜一憂せずにメンタルを保つこともビジネスにおけるチャレンジの姿勢に生かされていると振り返ります。

今でも月1回は、友人達と麻雀卓を囲むと語る小川氏。ビジネスの人脈形成にも一役買っているようです。

変化する暮らしに合わせた事業変革を

今後の展望について尋ねると「高齢化や人口減少が進み、人々を取り巻く環境は大きく変わっており、今までの業態を続けているだけでは、その変化に対応できない。DX化などを通して、常に事業の変革に取り組んでいきたい」と意気込む小川氏。福井に新たな風を吹き込み続ける大津屋の新たなチャレンジに期待が膨らみます。

ハピリン２Ｆで地元産品を扱う“福人喜（ふくにんき）”は酒造業を営んでいたときの銘柄が由来